

京都芸術大学  
大学院芸術専攻  
芸術実践領域

Contemporary  
Art  
Practice

Arts  
Major

Graduate  
School

Kyoto  
University  
of  
the  
Arts

Contemporary Art Practice, Arts Major, Graduate School, Kyoto University of the Arts

C  
A  
P  
S



## 学びの場から、世界へ

京都でアートを学ぶことは、「制作の場」を得るだけでなく、自分の表現がどこにつながっているのかを、知と経験を通して確かめ直す時間でもあります。

京都は、世界へ直接つながるゲートウェイです。国内外の美術関係者が頻りに訪れ、作品や人を紹介し合うなかで、関係と信頼が育まれていきます。コミュニティの規模が程よく、出会いが継続しやすいこともこの街の強みです。国際的な展示やフェアが重なり合うように立ち上がり、学内の制作と街の動きが響き合う季節が毎年巡ってきます。

さらに、京都で育つネットワークは修了制作の期間だけにとどまりません。在学中から修了後まで続く関係が、次の展示や協働、海外での活動へとダイナミックに橋を架けていきます。制作環境と住環境のバランスの良さも、長期的に作品を育てるための重要な土台になります。

世界へ出ていくほど、私たちは自らのルーツを見つめ直します。そのとき必要なのは、知識だけではなく、身体を通して得られる認知と、自分がどこに立っているのかという実感です。京都では、技の時間が至る所に染み込み、美意識が堆積し、職人やアーティストも身近にいます。過去は保存されるのではなく、手に届く距離で更新され続ける感覚として立ち現れます。

ここで学ぶことは、世界へ向かうための助走であり、同時に自分の根を張るための贅沢な回り道でもあります。そんな京都での豊かな学びを体現しているのが、私たちの大学院です。

芸術実践領域長  
多和田有希



Photo: Kenryou Gu

©ARTISTS' FAIR KYOTO

## 京都芸術大学大学院芸術専攻

Arts Major, Graduate School,  
Kyoto University of the Arts

少数精鋭で専門性と実践力を磨き、  
トップアーティスト・研究者への道を拓く

・芸術実践領域

・芸術文化研究領域

京都・瓜生山キャンパスで少人数ゼミを基本とした指導を受けつつ、高度な作品制作や研究を深めるための専攻です。修了後の専門的キャリア実現のため、国内外の美術関係者やアーティスト、研究者との交流機会を多く設け、学内の研究センター・附置機関とも連携して、幅広く社会で活躍するための実践的スキルや知識を身につけます。

本学の様々な研究センター・  
附置機関がそれぞれの  
研究成果やネットワークを  
活かして設計した

「プロジェクト科目」等の授業を、

自らの進路やテーマに  
合わせて複数受講します。

社会と連携したアクチュアルな学びを通じて、専門性を深め、広げ、修了後に社会で活躍するために必要な実践的なスキルやネットワークの修得を目指します。



長沢楓 (2025年修了作品展)



中央 白旗花呼 (2026年修了生)

中川もも (2025年修了作品展)



## 芸術実践領域

Contemporary Art Practice

世界で活躍できるアーティストやキュレーターへの育成・輩出を目指します。そのために、第一線で活躍するプロフェッショナルによる指導を受けて専門的スキルを高めるとともに、自己の作品や立ち位置を客観的に見つめる視点や、作品を言語化し伝える力を実践的に養います。

主な分野

油画 | 日本画 | 版画 | 写真・映像 | 彫刻・立体造形 | 陶芸 |  
染織テキスタイル | パフォーマンス |  
アート&キュレトリアル・プラクティス

\*アート&キュレトリアル・プラクティス (Art & Curatorial Practices) 分野は、  
英語による指導や授業を受けることがあり、英語による修士論文の執筆も可能です

## 芸術文化研究領域

Arts and Culture Studies

京都を中心に、様々な人々によって育まれてきた有形・無形の芸術文化の「今」を肌で感じ、その価値を鋭く捉え、芸術文化の持続的活用を目指します。そのために、論文執筆に留まらず、実践的な授業・研究活動を通してコミュニケーション力や表現力を鍛えます。

主な分野

日本庭園研究 | 文化財保存修復 | 文化財科学 | 考古学 |  
芸術理論・芸術史 | 文化研究 | 舞台演劇研究

Photo: Natsumi Kinugasa



講評をうける  
ゲスト、教員、客員

作品をつくる

ネットワークを  
つくる  
人的交流

領域横断的スタジオ  
Cross-disciplinary Studio

美術関係者の  
スタジオ来訪

展示方法の研究と実践

CAPS

プロダクト制作

企画・展示  
ギャラリー、商業施設、  
美術館

活動の複数性 (S)  
Diverse Activities

教員・修了生・現役生が  
共働する展覧会

プロデュース

キュレーション

## CAPSとは

Cross-disciplinary Studio / Diverse Activities

CAPSは、京都芸術大学 大学院 芸術専攻 芸術実践領域 (CAP: Contemporary Art Practice、旧・美術工芸領域)を中心に、あらゆる方向へ動的に広がる活動の総称です。芸術教育を社会における生きた実験と捉え、展覧会の企画・制作・プロデュースなど、正規教育の枠を超えた多様な創造的活動を展開しています。

在校生、修了生、教員がアーティストとして対等な関係を築きながら、互いに刺激し合い、活動を推進しています。活動を通じて築かれたつながりは、修了後もプロフェッショナルな現場へと広がり、さらなる創造の機会へとつながっていきます。

2025年には改修工事を経て、NC棟最上階のワンフロア全体が芸術実践領域の専用アトリエとしてオープンし、このスタジオが「CAPS (Contemporary Art Practice Studio)」と名付けられました。

名称の「S」には、複数の取り組みの象徴としての意味と、自由な実験の場としての「スタジオ (studio)」という意味の両方が込められています。

Cross-disciplinary Studio  
Diverse Activities

## 領域横断的スタジオ

### Cross-disciplinary Studio

2025年春、京都の街を一望するNC棟最上階全体が、芸術実践領域の大学院生専用アトリエ「CAPS(Contemporary Art Practice Studio)」としてオープンしました。名和晃平先生率いるクリエイティブ・プラットフォーム「Sandwich」が設計し、国内屈指の展示インストーラーであるスーパーファクトリーが施工。未来のアーティストのために必要な機能を備えた理想の教育空間を実現しました。

個人の制作スペースだけでなく、ライブラリーやキッチンも備えており、50名以上の学生が心地よく制作や研究に集中できる環境が整えられています。ホールやワークルームには調光機能のある照明が配備され、本格的な展示やプレゼンテーション、制作等にいつでも活用できます。このような「移動しながら考える」「滞在しながら創造する」環境づくりが、CAPSの特徴です。

Cross-disciplinary Studio



## 創造の現場から未来へ

### From the Site of Creation to the Future

空間は芸術を志向し、実践するための装置である。

CAPSの設計には、Sandwichを主宰する私自身が国内外で制作・滞在した経験が反映されています。京都という文化的な文脈と、グローバルな芸術拠点の特性を融合させ、ここを単なる「大学の一部」ではなく、芸術表現の発電所＝創造のエンジンとしたいと考えました。

院生の皆さんには、時間と空間の密度を最大限に活用し、技術や表現力だけでなく、世界と向き合うまなざしと姿勢をこの場所で培ってほしいと願っています。

また、CAPSは大学院の短い時期を過ごすためだけの場ではなく、卒業生や新入生、そして今でも現役で活躍する教員たちが自由に協働するプラットフォームでもあり、ここからユニークなプログラムが世界に向けて発信され続けるスタジオになって欲しいと思います。

そのため、CAPSに訪れ、CAPSに関わる人々の記憶に残るように独自のステンシルフォントを配置したロゴマークをデザインし、入り口の壁面と扉に配置しました。

CAPSが皆さんにとって、思考と感性を更新し続ける「場所＝スタジオ」であり続けることを願ってやみません。

大学院教授、CAPSディレクター

名和晃平

## 制作スペース

個々の制作スペースでは、幅広い分野の学生同士がお互いに刺激を受けつつ制作に集中できます。広々としたテラスも備え、自然光や風が心地よく通ります。



CAPS LIBRARY

## ライブラリー

エントランスには、厳選されたアートブックや図録が配架されています。制作の合間にいつでも手に取り、知識やインスピレーションを得ることができます。本は随時追加される予定です。

## ホール (展示スペース)

スタジオを東西に貫くホールでは、常時作品展示が可能です。調光可能な照明が配備され、完成したばかりの作品を自ら展示・検証することもできます。



## スタジオビジット

大学院専任教員によるゼミや客員教授による講評に加えて、国内外から訪れる数多くのトップ・アーティスト、キュレーター、ギャラリスト等から直接講評を受け、将来に繋がるネットワーク形成やデビューのチャンスを獲得する機会が豊富にあります。実際にスタジオビジットをきっかけとして、在学中や修了直後にデビューした学生は少なくありません。

## ワークルーム

CAPSで最も眺めの良い大窓を備えるワークルームは、セミナー、上映会、パフォーマンス、展覧会、担当教員とのゼミや学生同士のミーティングなど、様々な用途に活用できます。





ウルトラファクトリー

## 各種工房・制作施設

### FACILITIES

各工房や施設には、専門知識と技術を備えた技官が常駐し、制作過程で必要なサポートや技術指導を受けることが可能です。さらに、学生一人ひとりに制作用のアトリエが与えられ、自主的な制作活動を日常的に展開できる環境が整っています。

ウルトラファクトリーでは、金属加工、樹脂成形、木材加工、シルクスクリーン、デジタルファブリケーションなど、多様な素材と技術を活用し、自由な発想をかたちにすることができます。

加えて、陶芸工房、版画工房、染織工房、プリントルーム、フォトラボといった専門分野に特化した制作支援施設も充実しています。

これらの施設を主体的に活用することで、実践的なスキルを身につけ、自らの表現の幅を最大限に広げることができます。

### FACILITIES



陶芸工房



撮影スタジオ



写真暗室



染織工房



プリントルーム



版画工房





## 竹内万里子

Mariko Takeuchi

教授 (専攻長)

写真史、批評、キュレーション

批評家・作家、キュレーター。早稲田大学政治経済学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了(芸術学)。フルブライト奨学金を受けて渡米。東京国立近代美術館、国立国際美術館客員研究員を経て本学教授。Paris Photo日本特集、国際巡回展「I'm So Happy You Are Here: Japanese Women Photographers from the 1950s to Now」など、国内外で数多くの展覧会を企画。共著多数。単著に「矛盾の海へ」、「沈黙とイメージ」がある。

作品を作るこのの本質は、自らの責任で自分自身を全うすることです。言い換えればそれは限りない自由を引き受けることであり、それゆえ言い訳の余地はありません。アーティストとは、この圧倒的な自由と孤独の中を生き抜く人のことを言います。そのために徹底して必要な思考、スキル、ネットワークを獲得したいと思う方に、ぜひこの大学院の扉を叩いてほしいと願います。私たちが全力で応援します。



## 鬼頭健吾

Kengo Kito

教授 | 現代美術

アーティスト。京都市立芸術大学大学院美術研究科油画修了。主な個展に「Multiple Star I, II, III」(原美術館ARC)、「Full Lightness」(京都市京セラ美術館)、「Reconnecting」(Japan House LA)、「Unity OnTheHudson」(Hudson River Museum NY)など。2008年五島記念文化賞を受賞しニューヨークに滞在、その後ドイツ・ベルリンにて制作活動。フラフープやパラソルなど、工業製品を空間に充満させることにより作品化したり、近年は布や鏡などを建物の構造や自然および人工の光といった環境に接続、干渉する作品を発表している。

アーティストやクリエイティブな仕事に就く上で、大学院で学ぶ機会は非常に重要です。学んできたことを深化させ、高度な知識や経験を得ることは、今後人生の分岐点で、後悔のない選択をするための支えになります。良い先生と巡り会い、展示の足がかりをつかめるなど、自身の努力は如実に結果として現れます。教員はそのための努力を惜しみません。将来、アーティストとして自立し、活躍する教え子が生まれるきっかけをつくるのが、私たちの使命だからです。



## 福本双紅

Fuku Fukumoto

教授 | 陶芸

陶磁器作家。京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程陶磁器専攻修了。主な展覧会に「Radical Clay: Contemporary Women Artists from Japan」(シカゴ美術館)、「健在する日本の陶芸 - 不如意の先へ -」(益子陶芸美術館)、「現代・陶芸現象」(茨城県陶芸美術館)など。作品は、メトロポリタン美術館(ニューヨーク)、ギメ東洋美術館(パリ)、茨城県陶芸美術館などに所蔵。

本学の大学院で陶芸を学ぶ意義は、他ジャンルのアート領域と交差しながら、土・火・時間と向き合い「なぜつくるのか」を深めることにあります。陶は不可逆であり、偶然や変化を受け入れる素材です。その制約の中で思考し、試し続けることが、表現を確かなものにします。制作を通じて、自分だけの問いを育て、深めていくことを期待します。



## 多和田有希

Yuki Tawada

教授 (領域長) | 写真、現代美術

アーティスト。東北大学農学部応用生物化学科生命工学専攻卒、カリフォルニア大学サンタバーバラ校交換留学。ロンドン芸術大学キャンパウェル・カレッジ(写真)卒。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻博士後期課程修了(美術博士)。主な展覧会に国際巡回展「I'm So Happy You Are Here: Japanese Women Photographers from the 1950s to Now」、「Photography Now」(ヴィクトリア&アルバート博物館[V&A])など。作品は東京都写真美術館、スミソニアン博物館、V&Aに収蔵。

制作に人生のプライオリティを置き、生活と人生の中心に据えて生きる覚悟のある方に来てほしいと思います。本学大学院は、自分の違和感や歪さを手がかりに深く潜り、探求を鍛える場所です。同時に、入学直後から制作と発表の機会が次々と訪れ、高密度の実践と外部との摩擦のなかで自分の輪郭が見えてきます。自分の軸を磨き、他者と交差しながら、長く走り続ける力を育ててください。

## 専任教員 | 2026年度 Faculty Members (2026 Academic Year)



## 神谷徹

Toru Kamiya

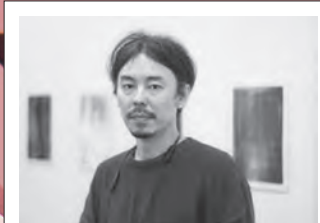
教授 | 絵

画家。絵の普遍性と必然性を「絵を使いながら」実践する。東京藝術大学大学院絵画科油画修了。政府奨学生としてNCAD留学、Temple Bar Gallery+Studios(ダブリン)にレジデンス、UAL(ロンドン)にて文化庁在外研修員。主な展覧会に「きれいにこわれる」(MtK Contemporary Art)、「息/ 臉の裏 / なぞる」(SCAI THE BATHHOUSE)、「Polyphony」(ARARIO GALLERY Shanghai)、「ZONE」(府中市美術館)など。作品は麻布台ヒルズ、龍美術館、Louis Vuitton表参道、虎ノ門ヒルズ、東京ミッドタウン、九州歯科大学、府中市美術館、京都芸術大学に収蔵。

すぐく当たり前の事ですが、芸術は矛盾や不可解なことから始まります。これを伝えたり共有したりするのは難し過ぎるかもしれないな、と途方に暮れます。大学院は、その疑問や矛盾や難しさをあえて試みる、社会に出る前のわずかな余剰時間でもあります。義務も束縛もありません。その時間をどう使うかは各自に委ねられています。頼まれなくてもやる、という自主性や意欲がこれほど求められる場もないのではないのでしょうか。気概のある人を心から求めます。



**浅田彰**  
Akira Asada  
教授  
批評、思想史、現代思想



**池田光弘**  
Mitsuhiro Ikeda  
教授  
絵画



**片岡真実**  
Mami Kataoka  
教授  
現代美術  
Photo: Akinori Ito



**清水博文**  
Hirofumi Shimizu  
教授  
絵画、版画



**高橋耕平**  
Kohei Takahashi  
教授  
現代美術、映像



**椿昇**  
Noboru Tsubaki  
教授  
現代美術



**中山和也**  
Kazuya Nakayama  
教授  
コンテンポラリーアート



**森本玄**  
Gen Morimoto  
教授  
絵画、素描

**専任教員 | 2026年度**  
Faculty Members (2026 Academic Year)



**ヤノベケンジ**  
Kenji Yanobe  
教授  
現代美術



**岩泉慧**  
Kei Iwaizumi  
准教授  
日本画、絵画、  
絵画技法材料、色彩研究



**金澤韻**  
Kodama Kanazawa  
准教授  
現代美術キュレーティング



**河野愛**  
Ai Kawano  
准教授  
現代美術、テキスタイル



**堤拓也**  
Takuya Tsutsumi  
准教授  
キュレーション、グラフィックデザイン、  
非制度的実践、批判的美術史



**居原田遥**  
Haruka Iharada  
専任講師  
アジア文化研究



**後藤雅樹**  
Masaki Goto  
専任講師  
金属彫刻、立体造形



**酒井稚恵**  
Chie Sakai  
専任講師  
テキスタイルアート、  
テキスタイルデザイン



**松平莉奈**  
Rina Matsudaira  
専任講師  
絵画、日本画



**山元桂子**  
Keiko Yamamoto  
専任講師  
染色



**大庭大介**  
Daisuke Ohba  
絵画



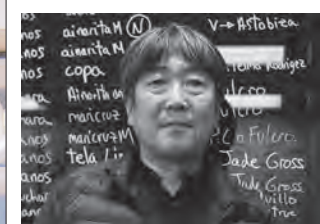
**沓名美和**  
Miwa Kutsuna  
現代美術史家、キュレーター、  
ディレクター



**小金沢健人**  
Takehito Koganezawa  
アーティスト/映像、  
ドローイング、インスタレーション



**下道基行**  
Motoyuki Shitamichi  
写真家・美術家 / 写真、  
現代美術



**島袋道浩**  
SHIMABUKU  
アーティスト



**高橋隆史**  
Takafumi Takahashi  
起業家、アートコレクター



**中井康之**  
Yasuyuki Nakai  
美術批評



**姫野希美**  
Kimi Himeno  
赤々舎代表 /  
アートブック出版、写真編集



**山田伸**  
Shin Yamada  
日本画家



**額賀古太郎**  
Kotaro Nukaga  
KOTARO NUKAGA代表

**客員教授 | 2026年度**  
Visiting Professors (2026 Academic Year)

## 2025年度 作品講評者

専任教員に加えて、次の方々から講評頂きました。

### 学外ゲスト

飯田志保子	インディペンデント・キュレーター / 国際芸術祭「あいち2025」学芸統括
石川卓磨	アーティスト、批評家
伊藤京子	細見美術館主任学芸員
伊村靖子	国立新美術館学芸課情報資料室長、主任研究員
井村亮介	京都美商、ギャラリスト
内海潤也	アーティゾン美術館
川井雄仁	アーティスト
菊竹寛	Yutaka Kikutake Gallery代表
北桂樹	現代写真研究者
黒田大スケ	アーティスト
軍地彩弓	gumi-gumi CEO
鮫島ゆい	アーティスト
塩見有子	Arts Initiative Tokyo [AIT] ディレクター
清水チナツ	インディペンデント・キュレーター
角奈緒子	金沢21世紀美術館学芸課長
相馬千秋	アートプロデューサー / NPO法人芸術公社代表理事 / シアターコモンズ 実行委員長兼ディレクター / 東京藝術大学大学院准教授 (GAP専攻)

千葉真智子	豊田市美術館学芸員
塚原悠也	contact Gonzo / KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター
堤拓也	ICA 京都プログラムディレクター
中村ケンゴ	アーティスト
藤本壮介	建築家 (レクチャーのみ実施)
保坂健二郎	滋賀県立美術館ディレクター (館長)
牧口千夏	京都国立近代美術館主任研究員
牧正大	MAKI Gallery
松川朋奈	アーティスト
丸山敬太	ファッションデザイナー
YOSHIROTTEN	アーティスト
米田尚輝	国立新美術館主任研究員

### 客員教授 (2025年度)

沓名美和	現代美術史家、キュレーター
小金沢健人	アーティスト
下道基行	アーティスト
高橋隆史	起業家、アートコレクター
中井康之	元国立国際美術館学芸課長
額賀古太郎	KOTARO NUKAGA 代表
姫野希美	赤々舎代表

## 2025年度開講授業 (一部)

### 芸術特論

\*2026年度以降は変更の可能性あり

#### 「芸術と思想」

浅田彰

#### 「芸術と知覚」

藤本由紀夫、ニシジマ・アツシ

#### 「ジェンダー美術史」

吉良智子

#### 「日本の美・再考」

福本繁樹

#### 「映像人類学」

川瀬慈

#### 「美術館の発展と展覧会史」

片岡真実

#### 「キュレーター連続講座」

飯田志保子、保坂健二郎他

#### 「美術工芸品の保存修復」

岡田文男、大林賢太郎他

#### 「日本の歴史と文化」

小川後楽他

#### 「個人取材入門: 声・記憶・アーカイブ」

木村俊介

## 修了生の声

### Voices of Graduates



2025年修了

### 中川もも

#### Momo Nakagawa

1992年京都府生まれ、在住。2025年京都芸術大学大学院修士課程美術工芸領域写真・映像分野修了。2025年、夜明け前|New Photography Award 第2回グランプリ受賞。2025 Dior Photography and Visual Arts Award for Young Talents選出。

主な展覧会に、OFF Bratislava curatorial section「PRIOR」スロバキア、2025、「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2025」STUDIO+|拡張する現代写真|TODA BUILDING、東京、2025、「Clonal images: specimens」PHOTO GALLERY FLOW NAGOYA、名古屋、2025、「KG+ PICK UP」Clonal images|MOGANA、京都、2025など。

#### Q 作品について教えてください。

私は自分が撮影した写真を元に新たなイメージを生成しながら、イメージと自分との相互作用に注目し、写真を用いたインスタレーションを展開しています。テクノロジーと共に生み出すイメージを生命体のように捉え、「クローナルイメージ」という概念を提唱しながら、生成と繁殖の実践を続けています。

最近関心があるのは、一度つくった作品を新たに別の作品へと変化させることです。T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2025で展示をしたときに、壁紙の作品を制作しました。壁紙をつくるのにけっこうなコストがかかるのに、一回展示したら撤去してしまうのが嫌だなと思ったんです。剥がした壁紙を京都に送ってもらって、それを立体作品にできないかと思って、制作に取り組んでいます。



T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2025「STUDIO+」拡張する現代写真|TODA BUILDING|展示風景

#### Q 大学院の環境はいかがでしたか。

大学院のアトリエは5人でシェアするような空間だったのですが、それが逆によかったです。一人で孤独になるのではなく、みんな熱心なので、制作の合間に話したりもしていました。スペースをシェアしているのがドイツと中国の学生で、それぞれ自分の国の話をしたりして、「普通」の基準がないから、けっこうグローバルな感じで過ごしていて、すごく面白かったです。

講評では大きなギャラリーの方などもゲストで来てくれて、それはすごくよかったです。アトリエにも先生が回ってきますし、ふらっとゲストが来ることもあって。全然放置されない大学院です(笑)。「明日海外

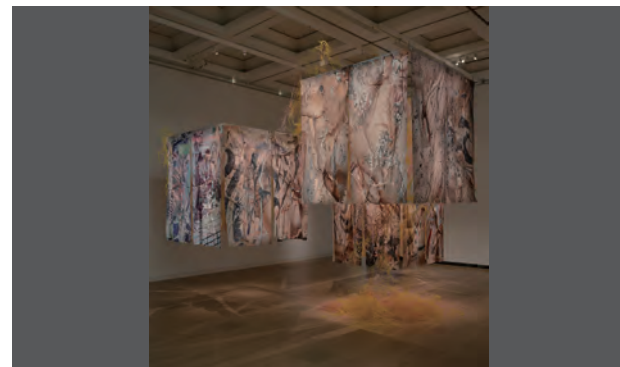
の人が来るから、英語で作品を説明して」と急に言われたり。そういう経験からも、臨機応変に対応できる力がつきました。

自分で動けるタイプの人には必要ないかもしれませんが、私はいつも締め切りに追われるタイプなので、学校にいれば誰かが来て、話をすることで制作が進むのは、環境としてすごくよかったです。

#### Q 学生選抜展「DOUBLE ANNUAL」はいかがでしたか。

「DOUBLE ANNUAL」は初めての大きな公募で、すごく緊張したのを覚えています。毎月進捗報告をして、夏休みなどにキュレーターの方が来て、実物の作品を見せながらフィードバックをもらいます。現役でバリバリ活躍しているアーティストやキュレーターが見てくれるので、とにかく緊張して、まずは度胸がつきました。

指導教員の多和田有希先生には、「自分が簡単に実現できないような、大きなプランを考えるべき」と言われていました。それもあって、国立新美術館で展示した際には、自分のスケールを超えた展示まで持っていけたと思います。現場には照明や設営のプロのスタッフの方がいて、美術の第一線の速さや見せ方、空気感が体感できたのはすごく大きかったです。国際的な基準でプロの美術の世界があって、そこでアーティストとして作品を展示する仕事を体感できたことで、自分の作品が世界につながると実感できました。この経験を通して、アーティストになりたいという気持ちが強くなりました。かける費用に応じた実現できることの違いも掴むことができ、いろいろな基準や価値観がそこで変わったような気がします。



DOUBLE ANNUAL 2023「反応微熱 これから生きるから」国立新美術館 展示風景 Photo: Kenryou Gu

#### Q これまでに海外での展示の機会はありましたか。

「2025 Dior Photography and Visual Arts Award for Young Talents」で、フランスのアルルで展示をしました。写真コースがある世界の様々な大学から応募者を募り、選ばれた人が現地で開催できる企画でした。先生が同行してくださって、一緒にフランスに行きました。その展示を観たスロバキアのキュレーターの方が連絡をくださったので、スロバキアの写真祭での展示も実現できました。

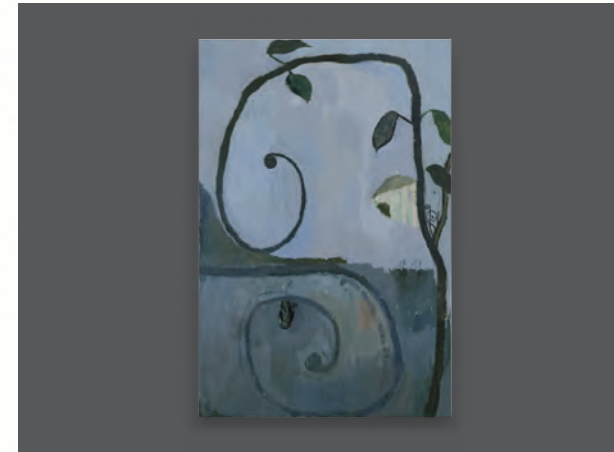
#### Q これから挑戦したいことを教えてください。

2025年に「夜明け前|New Photography Award」のグランプリを受賞し、2026年は個展と、写真集の出版を予定しています。大型プリンターから定期的にイメージが出力されて、それをカットして組み入れることで、会期中に形が変わっていくような展示をしたいと考えています。写真集については、先日のミーティングで展示と連動するようなプランができました。作品にあらわれる変化やエイジングといった要素を、本の形態にもどこかで取り入れられたらと思っています。

取材: 2026年1月13日

#### Q 作品について教えてください。

僕は植物や動物など、自然の中にあるモチーフを反復して描いています。東京から京都に移ってから、こもって制作をするだけでなく、お寺や蚤の市をまわって、古い工芸を見るが多くなりました。陶器の絵付やお寺の襷絵などに、鳥や植物がモチーフとしてよく登場することに気付いて、民藝や工芸に興味を持ちはじめました。いつの時代にも共通して人が描きたくなったり、関心を持ったりしてしまうものを、絵画の中で描けたらいいと思っています。実際の植物や動物を描いているというよりは、工芸品の絵付のように一回記号化されたものを、もう一度描き直すような感覚です。学部どき木版画を学んだのもあって、木を彫るという行為も混ぜながら、絵画と工芸の間のような作品をつくっています。



長沢楓「Scrollwork」2026年 Photo: Kenji Takahashi

#### Q 大学院の環境はいかがでしたか。

まずはオープンスタジオや展覧会などを通じて、領域を横断した学生同士の関わりがあることです。

オープンスタジオは、今は大学全体の行事になっていますが、僕が在学していた当時は、卒展の時期に合わせて学生の自主企画で開催していました。修士1年生と2年生が一緒になって、ふだんアトリエとして使っている場所を開放してそこで作品を展示して、販売も行なうイベントでした。M1のときに僕と同期の大上巧真さんと二人で、そのイベントのリーダーを務めたんです。そのときに日本画や写真などいろいろな学科の人と関わって、それがきっかけで、領域を超えた交流がすごく多くなりました。

僕は油画を専攻していましたが、展覧会をするときは、自分の作品だけをよく見せるのではなく、みんなで協力して、全体として良い展示をつくるのがすごく大事だと思うんです。そのためには他の領域の人たちとふだんから関係性を積み重ねて、一つのゴールに向かって展覧会をつくっていくことが必要だと思います。そうやって協力して、最後の修了展を実現できたのはすごく良い経験でした。

#### Q 先生方との関わりはいかがでしたか。

油画の先生に加えて、写真など他の領域の先生が教えてくれることも参考になりました。客員や非常勤の先生含め、いろいろな先生が大学に来てくれます。将来どうすべきかを教えてくれる先生もいますし、逆に今固まろうとしているものを崩してくれる先生もいました。1週間の中でさまざまな先生が来て、まったく別のことを言ってくれるという状況が、僕にはすごく良かったです。多様なアドバイスをもらいながら、最後の答えは自分で考える。それができる環境なのが、この大学院の良いところだと思います。

#### Q 作品や、自分自身の転機となった展覧会はありませんか。

M1のときのオープンスタジオが、自分の中で一番の転機になりました。大学院を修了するタイミングで同期の大上くんとかカ・イシイギャラリー前橋で二人展を行なうことができたのですが、実はその展覧会も、ギャラリーの方がオープンスタジオを見て、作品を買ってくださったことがきっかけなんです。ほかにも先生や先輩の紹介で展示も複数経験できたり、オープンスタジオの経験が、その後外に全部広がっていきました。そこで自分の今やっていることの芯が固まったし、今の制作につながる流れができたと感じています。いろいろな人と会える環境にあるのが、この大学院の良さです。ギャラリーや美術館の方も含め、充実したゲストがこんなに直接来てくれるのは貴重だと思います。



長沢楓・大上巧真「マーク・メイキング」(タカ・イシイギャラリー前橋、2025年)展示風景 Photo: Shinya Kigure Courtesy of Taka Ishii Gallery

#### Q これから挑戦したいことを教えてください。

在学中は絵を描く際に、形を追いかけていました。工芸品の中に描かれているものをそのまま写した作品もありますし、わりと形を保ったまま記号的に配置して絵をつくっていました。最近は工芸の中の型や要素を、もっと抽象的に絵画の中に落とし込んでいくことに取り組んでいます。それをこれから掘り下げていこうと思っています。

取材: 2026年1月15日



2025年修了

### 長沢楓

#### Fu Nagasawa

1999年高知県生まれ、京都府在住。2022年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業、2025年に京都芸術大学大学院修士課程美術専攻油画領域修了。

主な個展に「残丘」(タカ・イシイギャラリー前橋、群馬、2026)、「☆(BOOK MARK)」(COHJU、京都、2026)、主なグループ展に「(subliminal) prelayer」(アートカビエフンか白原、東京、2025)、「Second Signal」(biscuit gallery、東京、2025)、「マーク・メイキング」(タカ・イシイギャラリー前橋、群馬、2025)、「SHIBUYA STYLE vol.17」(西武渋谷店美術画廊・オルタナティブスペース、東京、2023)など。

「CAPS: Contemporary Art Practice | Studio - CAPS 2025展」大阪高島屋、2025年  
「Osaka Art & Design 2025」の一環として、大阪高島屋1階から7階で開催された展覧会。本領域在学生、修生および教員48名による約140点の多彩な作品を紹介した。



小宮太郎 (2016年修了生、博士)



鬼頭健吾・名和晃平 (教員)

## 活動の複数性

### Diverse Activities

#### 学外での展覧会

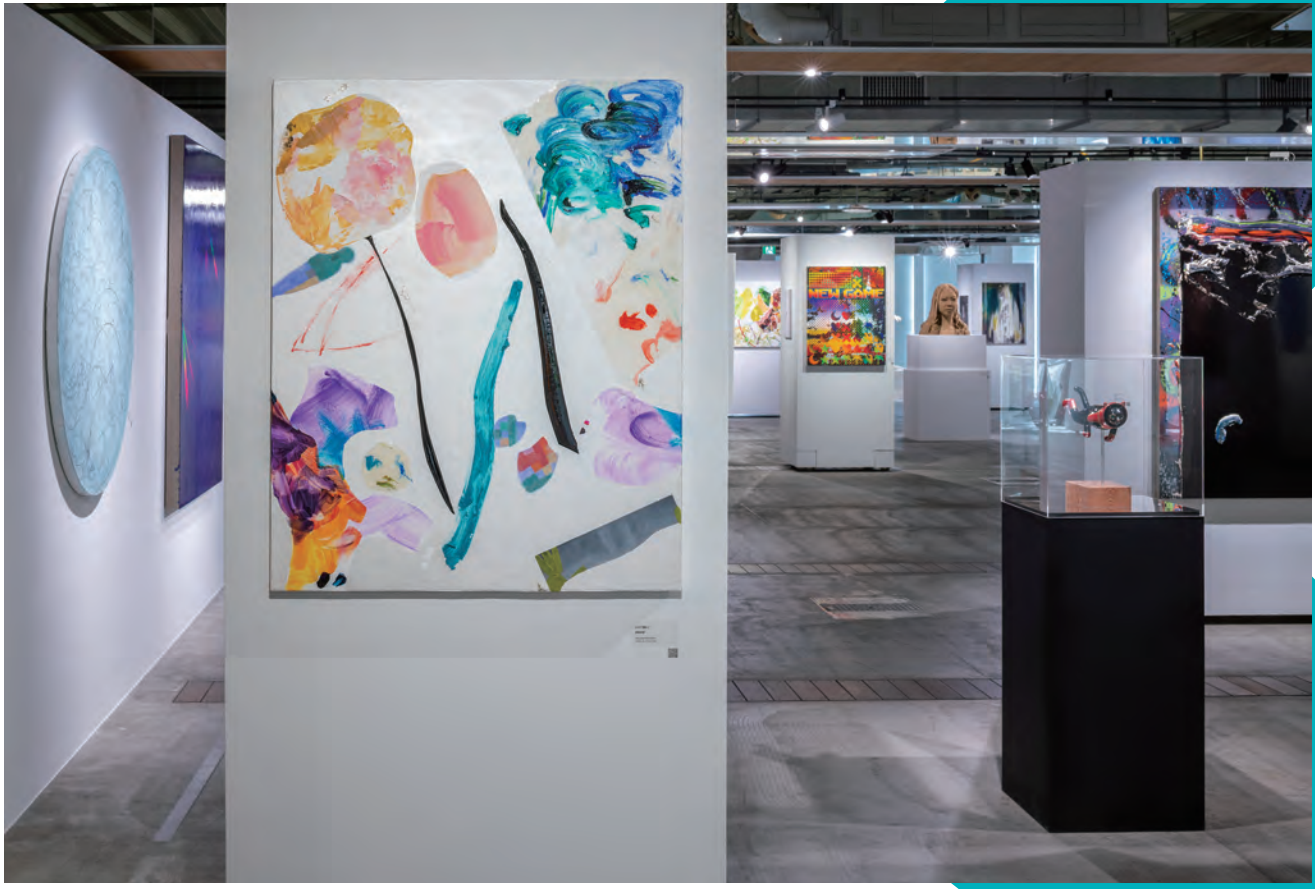
ARTISTS' FAIR KYOTOをはじめ、学外での展覧会やインターンシップ、アート業界のプロフェッショナルを招いた講評会など、活気ある現場で入学時から実践経験を積み、アーティストとしてのキャリアを築く機会も豊富に用意されています。

### Diverse Activities



「京都展 The Echoes of East Kyoto」WHAT CAFE、東京、2024年

東京・天王洲のWHAT CAFEで開催された企画展。本領域修了生を中心とする若手作家50名と教員が参加し、京都のアートシーンの現在を紹介した。



「DOUBLE ANNUAL 2025 アンユラスのじゃぶじゃぶ池 / omnium-gatherum」国立新美術館、東京、2025年

国立新美術館で開催された、京都芸術大学と東北芸術工科大学の学内選抜展。89組の応募者から選ばれた11組が、キュレーターとの協働を通して作品を発展させ、成果を発表した。



## 研究センター・附置機関との連携

### Collaboration with Research Centers and Affiliated Institutions

京都芸術大学にはさまざまな研究センター・附置機関があり、芸術文化に関する専門的な研究を深めると共に、学内の知的財産を社会に還元する役割を担っています。大学院生は、これらの研究センター・附置機関がそれぞれの研究成果やネットワークを活かして設計した「プロジェクト科目」を、自らの進路やテーマに合わせて複数受講します。社会と連携したアクチュアルな学びを通じて、専門性を深め、広げ、修了後に社会で活躍するために必要な実践的なスキルやネットワークの修得を目指します。

プロジェクト科目(2025年度、一部)

「海外ゲストによる連続講座」

ICA京都

「美術市場構造の研究と実践」

ARTOTHÈQUE

「博物館資料の調査・保全と展示企画」

日本庭園・歴史遺産研究センター

「伝統的な作品に新たな価値を与えるプロジェクト」

デザイン工芸研究センター

「最前線で活動する演出家との対話と実践」

舞台芸術研究センター

Collaboration with Research Centers and Affiliated Institutions



## ICA京都

### Institute of Contemporary Arts Kyoto

京都芸術大学のInstitute of Contemporary Arts Kyoto — 略称「ICA京都」は、アートの創作・展示・批評・研究がグローバルに展開されるようになった現代にあって、内外の同様なセンターとネットワークを結びながら、留学やレジデンスなどによる交流を具体的に促進する交換台のような役割を果たすべく、2020年度に創設されました。



## ARTOTHÈQUE

### アルトテック

本学研究センターの附置機関として、大学院修了生を中心にアーティストのキャリア形成のプラットフォームとして活動しています。構想自体は2010年前後に立ち上がり、美術工芸学科の卒業制作展のアートフェア化を契機としてARTISTS' FAIR KYOTOの創設に主導的役割を果たしてきました。

その間、DMG森精機株式会社、ユニバーサルミュージック合同会社、OCA TOKYO(三菱地所)など多くの企業コレクションも担当し、個人コレクターにご購入いただいた作品を含め10年ほどで数百点を数えるまでになっています。またエル・ショップのアート部門にもお招きいただくなど、その効果は地味ながらも多くの若手アーティストたちの創作活動継続と発展に寄与する事となり、スタジオの京都回帰や有力コレクターのスタジオビジットの活性化など豊かな生態系の形成につながっています。

今後は関西広域の美術館と連携した若手の個展開催や企業支援を受けながら大型作品保管のストレージ開発などに着手したいと考えています。

Photo: Kenryou Gu

## 日本庭園・歴史遺産研究センター

1996年に設立された日本庭園についての専門研究機関で、その後、歴史遺産研究部門を加え、活動の場を拡げました。日本の庭園文化に関する特色ある研究のほか、地方公共団体など多方面から、歴史的遺産の保全や活用に関する調査を受託しています。大学院生は、本研究部門が行う庭園文化に関する研究や公開講座の運営、受託調査に携わり、実践的な活動を行うことができます。



## デザイン工芸研究センター

デザインと工芸を一体と捉え、工芸文化の新たな価値を創造し、国際的な発信を行います。京都や各地の研究所・工房を学びの場とし、手仕事、工芸技術の奥深さを理解し、他の領域へと紹介することのできる、ハイレベルの人材教育を行います。伝統を若い世代の感性へと橋渡しし、留学生を通して世界との交流を促進、工芸分野が直面する後継者や材料不足、工芸品の販売減少といった課題の解決にも貢献します。



## 舞台芸術研究センター

舞台芸術の創造過程の総体を研究対象として、「創造の現場」と「学術研究」との有機的な結びつきを図るべく2001年に発足した舞台芸術研究センターは、本学の建学理念である「芸術立国」「京都文藝復興」を実現するための拠点として位置づけられています。

「創造する伝統」という公演理念のもと、学内劇場である「京都芸術劇場」を運営し、多様性を持ったプログラムを実践。また学内外の研究者による研究活動、及び他研究機関との共同研究などを推進し、舞台創造の現場と密接に連携をとった研究・創造のネットワークづくりをめざしています。



Photo: Makoto Omodaka (ITP)

## 文明哲学研究所

人類の幸福と平和な世界の実現を祈念した徳山詳直初代理事長の意思により、2012年に設立されました。本学の建学理念である「芸術立国」の根底にある「芸術とは何か」「人間とは何か」という問いに向き合い、社会の中での芸術の役割、芸術と科学の関係、芸術が人のところに及ぼす影響を人文社会科学、行動科学など多面的なアプローチで明らかにすることをめざしています。

## 在学生・修了生 展覧会開催実績 (2025年度、一部)

藤本純輝  
グループ展《見ること、暮らすこと》  
井村美術館 メインスペース  
京都  
—  
高田久恵  
個展《高田久恵 日本画展 一花のたより》  
あべのハルカス近鉄本店  
タワー館11階 アートギャラリー  
大阪  
—  
品川亮  
個展《And Life would all be Spring》  
京都 蔦屋書店 ギャラリー  
京都  
—  
中平美紗子  
個展《Weave a Tale》  
OXH Gallery  
アメリカ  
—  
高田咲恵  
個展《高田咲恵 日本画展 めぐり、めぐる》  
あべのハルカス近鉄本店  
タワー館11階 アートギャラリー  
大阪  
—  
岩橋優花  
個展《光の根》  
PURPLE  
京都  
—  
山田康平  
グループ展《企画》《吸い込まれる》  
Gallery Trax  
山梨  
—  
奥野久美子  
公募展《入選》《第43回 上野の森美術館大賞展》  
上野の森美術館  
東京  
—  
中川もも  
個展《clonal images》  
MOGANA  
京都  
—  
三浦光雅  
個展《ある、ない、あった》  
ASTER Curator Museum  
金沢  
—  
近藤大祐  
作品展示《Drip color version  
UNITED ARROWS # 2, # 3, # 4》  
BEAUTY&YOUTH  
UNITED ARROWS 大阪店  
大阪  
—  
西垣肇也樹  
作品展示  
カタールパビリオン (EXPO 2025 大阪・関西万博)  
大阪  
—  
大和美緒  
グループ展  
《SMoAコレクション1期「コレクションに橋をわたす」》  
滋賀県立美術館  
滋賀

CAPSインスタグラム公式アカウント  
在学生・修了生の展覧会情報など  
Instagram: @kua\_daigaku\_caps



白石効哉  
グループ展  
《ART LOUNGE PROJECT #6 -  
NOT QUITE HERE, NOT QUITE THERE》  
LE METTE ADELIN ART LOUNGE  
杜の街プラザ  
岡山  
—  
川村摩那  
公募展《大賞》《群馬青年ビエンナーレ2025》  
群馬県立近代美術館  
群馬  
—  
大久保紗也  
個展《project N 99 大久保紗也》  
東京オペラシティ アートギャラリー  
東京  
—  
能條雅由  
個展《過ぎ行く時の傍らで》  
京都 蔦屋書店 ギャラリー  
京都  
—  
神馬啓佑  
グループ展《Oh Deer》  
南城美術館  
沖縄  
—  
熊谷亜莉沙  
個展《天国泥棒》  
ギャラリー小柳  
東京  
—  
檜皮一彦  
グループ展  
《開館30周年記念展 日常のコレオ》  
東京都現代美術館  
東京  
—  
空豆アザ  
グループ展  
《Artful Gaze, Heart's Pursuit》  
高剣父記念館  
中国  
—  
宮本杏珠  
個展  
《je vois le couleur - その色が見えている》  
ギャラリー素  
京都  
—  
永山可奈子  
企画  
《je vois le couleur - その色が見えている》  
ギャラリー素  
京都  
—  
白旗花呼  
グループ展  
《もっどパッションを》  
Yutaka Kikutake Gallery 10周年記念展  
Yutaka Kikutake Gallery Kyobashi / Roppongi  
東京  
—  
西村彩乃  
芸術祭 / レジデンス  
《原始感覚美術祭》  
長野県大町市 (木崎湖周辺ほか)  
長野

東慎也  
グループ展《Plastic Love》  
Galerie Marguo  
フランス  
—  
今西真也  
個展《ひろがってゆくイマージュ》  
nca | nichido contemporary art  
東京  
—  
竹内義博  
グループ展  
《The Invisible Heart》  
River City Bangkok  
タイ  
—  
家田実香  
作品展示  
フェンディ 伊勢丹新宿店  
東京  
—  
今子青佳  
個展《デジタルの書》  
立命館大学 平井嘉一郎  
記念図書館 1F ギャラリー  
京都  
—  
三浦光雅  
個展《思考の打算》  
imura art gallery  
京都  
—  
香月美菜  
個展 / レジデンス  
《Tomoe: The Essence of Pigment and  
the Shape of Duality》  
O Sculpture Art Space  
マレーシア

## 修了生の就職先・ 進学先 (一部)

- 2026年修了生
- 株式会社ドゥミルサンク
  - 株式会社V'works
  - 株式会社今与
  - 寺田倉庫株式会社
  - TERRADA ART STUDIO 京都
  - 五条画塾堂本店
  - 株式会社政策技術研究所
  - 京都芸術大学大学院博士課程 (進学)
  - 東京芸術大学大学院博士課程 (進学) ほか
- 2025年修了生
- アートフロントギャラリー
  - 株式会社カインズ
  - 京都府教育庁
  - 有限会社カイカイキキ
  - 京都芸術大学大学院博士課程 (進学)
  - 京都芸術大学 (非常勤講師) ほか

## よくある質問

### Frequently Asked Questions

京都芸術大学大学院芸術専攻  
芸術実践領域  
ガイドブック  
Contemporary Art Practice,  
Arts Major, Graduate School,  
Kyoto University of the Arts  
Guidebook

#### 大学院について

修士課程で指導教員は指名できますか。

論文及び実技指導教員とも入学後に研究テーマや希望等を考慮して大学が指名・決定します。

大学院の教員に直接相談できますか。

教員の連絡先をお伝えすることはできません。また、メールの転送等も承っておりません。研究領域の相談等で面談をご希望の場合、入学説明会で行われる教員面談の予約申し込みをしてください。

授業は全て日本語で行われますか。

原則、授業は全て日本語で行われます。一部のプログラムは英語で実施することがあります。

修士・博士課程に入る前に研究生として在籍できますか。

研究生制度はありませんか。

本学に研究生制度はありません。

大学院に進学すると学費はどの程度かかるのでしょうか。また、奨学金制度はありますか。

以下のページをご覧ください。



学費・奨学金制度

#### 入試について

どんな入試制度がありますか。募集要項や願書はどうやって入手できますか。

以下のページをご覧ください。



募集概要

留学生用の入試はありますか。

大学院の留学生専用入試は設けておりません。

留学生が入試に出願する際に日本語試験の要件はありますか。

大学院の出願要件に日本語試験に関する要件は設定しておりませんが、出願資格にある通り、日本語での修学能力が必要です。

また、博士の学位取得には論文の執筆が必須であるため、日本語能力試験(JLPT)N1程度、日本留学試験(EJU)280点程度の日本語能力レベルが求められます。

入学試験の面接日程を選ぶことはできますか。

日程を選ぶことはできません。受験票公開時に日時についてご案内いたします。指定された日時に受験してください。

10月入学や、秋期入学制度はありますか。

本学に秋期入学制度はありません。4月入学となります。

合格発表は大学WEBサイト上で発表されますか。

合格発表日の10:00(日本時間)にWeb出願システムにて、合格発表を行います。

#### 出願について

出願資格があるかを確認したいです。

トラブル防止のため、出願資格に関する個別の事前確認は行っておりません。必ず各自で募集要項に記載の出願資格を確認のうえ、自身が該当するかを判断してください。

専門学校の証明書は必要ですか。

出願書類に専門学校の証明書類は不要です。提出された場合も選考書類には含めません。

他の大学院を既に卒業していますが、大学の卒業証明書や「学士」学位取得証明書は必要ですか。

大学院入学資格を確認するために「大学の卒業証明書」と「『学士』学位取得証明書」が必要です。

成績証明書に「卒業」の記載がありますが、卒業証明書を提出する必要がありますか。

どちらも提出が必要です。提出書類は全て揃えて提出してください。

出願書類の一部が期限に間に合いません。期間外に追加で送付してもいいですか。

期間外に到着した書類は受付できません。全ての書類が期間内に到着するよう手配してください。

郵送した提出書類が届いているかを確認するにはどうしたらいいですか。

利用した輸送機関の追跡サービスでご確認ください。各社WEBサイトより確認することができます。到着済みの状態となっていれば、受け付けされています。書類不備などがある場合にのみ大学より連絡を行う場合があります。

ディレクション  
竹内万里子  
多和田有希

編集  
櫻井拓 (のほ本)

編集協力  
あべのえる (のほ本)

デザイン  
大西正一

取材協力  
中川もも  
長沢楓

撮影  
Kenryou Gu  
Oto Hanada  
Akinori Ito  
Shinya Kigure  
Taehee Kim  
Natsumi Kinugasa  
Hikari Okawara  
Makoto Omodaka (ITP)  
Nobutada Omote  
Kenji Takahashi

印刷・製本  
有限会社修美社

発行日  
2026年2月28日

発行  
学校法人瓜生山学園  
京都芸術大学大学院芸術専攻  
芸術実践領域  
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116  
TEL: 075-791-9122 (代表)



Website



Instagram:  
@kua\_daigakuin\_caps